『ウィリアム』

「身長、駄目。あっちは体型。あれは年齢がきつい、か」

アルはとある街道の道端で休憩をしていた。王都から少々離れた此処は、王都と他をつなぐ街道の収束点。その少し先で休憩、と見せかけた観察をしているのだ。

ちなみに服は途中で行商から買った。少し嫌な顔をされたが、糞臭い硬貨でも金は金。使えなくはない。嫌な顔はされるが」

「なかなかいないもんだな。ここで慌てちゃ駄目だが、こうもハズレばかりだと、少し方向修正も必要かも」

アルが少し自信なさげに表情を曇らせる。

「ってもな。これしか……………ん？」

アルの視線の先、とある人物が目に入った。

「身長、体型、年の頃、条件は完璧。あとは出身国次第、か。これで何人目か割れたが、当たってみるか」

アルは腰を上げ、視線を合わせた人物の後ろを歩き始めた。

「やあ、はじめまして。火をお借りしてかまいませんか？」

いきなり声を駆けられた青年は驚いた目で相手を見る。おそらくこちらのコトアで話しかけられたことは理解できるが、よく聞き取れなかったのだ。

「……？ア－、ワタシ、マダ、コトバ、ムズカシイ」

「えーっと、出身国は何処ですか？」

対面する男は、少し伝わるようにゆっくりと話した。

「……ルシタニア」

おそらく故郷の名を質面されている。そう考え青年は応えた。ただし相手が知っているとは思えない。案の定対面の男は面食いて――

『随分遠くから来られたのですね。ようこそアルカディアへ』

「！？」

いきなり母国語で話しかけられて逆に面食らった青年。

『私も少したびをしているもので、一応そこそこ外国語に精通しているのです。あ、先程は日をお借りしてもよろしいですか、と声を掛けさせていただきました』

『ど、どうぞ』

青年は驚愕しっぱなしである。ここからルシタニアは多くの国を挟んだ先にある。しかも七王国の一つであるアルカディアとは比較にならないほどの小国。知っていることでさえ驚きだが、言葉お話せるなど青年の思慮の外である。

『いやー、自分と同じくらいの年でここまで長旅をするなんて、すごいですね』

「いえ、僕なんて全然。それよりも同い年で外国語がそんなに堪能だなんて。貴方のほうがよっぽどすごい人だと思います」

「ルシタニアは貴方が思うよりも有名だとおもいますよ。木造の工芸品はこっちの貴族にも人気ですし、薬草学に関してルシタニアは他国の数段先を行っている。鍛冶分野では他国に比類なき剣を作るとされていますしすごい国です」

にっこりと微笑む男に、青年は少しずつ心を解きほぐされるようだった。

『ああ、そういえあ自己紹介がまだでしたね。私の名はノルマン。貴方は？』

『ウィリアムです。よろしく、ノルマンさん』

青年、ウィリアムはスッ会気を許していた。それほどノルマンという男は、不思議な魅力を持つ男であったのだ。同じ年頃であることも大きい。とにかく気が合う、ウィリアムはそう思い始めていた。

『ノルマンさんはどうして旅を？』

『そうですね。広い世界を見てみたくて、旅を。ただ甘くはないですね。食うに困ってトレジャーハントの真似事などをしていましたよ、あはは』

『トレジャーハント！？すごい！話を聞かせてくれませんか！？』

ウィリアムの食いつきに、ノルマンは苦笑する。それにちょっぴり恥ずかしくなったのか、ウィリアムはかーっと赤くなった。

『かまいませんよ。そうですね。あれは七王国の――』

夜通し語り明かした二人。すっかり打ち解けた様子で、あと数日、一緒に王都に向かうことになった。

二人の横を荷馬車がすれ違う。ふとウィリアムはノルマンの頭を見た。

『ところでノルマン。なんで君はバンダナをしているんだい？』

すでに呼び捨てで呼び合う中にまで深まった二人。

『白髪が多いんですよ。あまり見栄えが良くないですからね』

『若白髪か－。僕の故郷では若白髪が多いと健康になると言われているよ。僕みたいな赤い髪は幸運の証とも言われているんだ』

『ほう、それは初耳だ。では、ルシタニアによったときにはバンダナを外しましょうかね』

『そのときは僕が案内するよ』

『よろしくおねがいします』

この時ウィリアムは核心していたのだ。きっとアルカディア王都についても自分はうまくいく、と。なぜなら自分にはこれほどの友が出来たのだから。

『僕らは友達になれたかな？』

『私はとっくに友達だと思ってましたよ』

そう言われて、ウィリアムは満面のえみを浮かべた。

この季節、まだ夜は冷える。二人は火に近付いて寒さを凌ぐ。

『僕はフィアンセがいるんだ。彼女に相応しい男になりたくて、ここまでやってきた。必ず成り上がって、故郷に凱旋するのが僕の夢なんだ』

ウィリアムが焚き火をはさんで語り始める。

『彼女はね、強い男としか結婚したくないって言うんだ。だから僕は旅に出ることに決めた。なのに彼女ったら、僕が旅に出る前に泣き出しちゃってね。行かないで、とかさ。勝手だよね。でも、好かれてるのが分かって嬉しかったかな。あとは武功を上げるだけさ！』

『フィアンセ、ということは家は裕福なのですか？』

ウィリアムは少し考え込む。

『んー、まあ豊かなほうだと思うけど、七王国の王都みたいになんでもあるわけじゃないし、森と山ばっかりのつまらないところだよ』

『なるほど。一度言ってみたいものです』

『おいでよ！ノルマンなら大歓迎さ！』

話は弾む。もう少しで王都。しかしウィリアムに不安はない。そんなものはどうに掻き消えていた。すべては友の、ノルマンのおかげである。

数日一緒に歩いた旅ももうすぐ終わり。明日昼頃には王都に至るだろう。

ウィリアムは少し寂しい気持ちで今宵を迎えていた。

『少し席を外してもよろしいですか？』

「何処へ行くんだい？」

ノルマンが徐に立ち上がる。

『まあトレジャーハントの真似事ですよ。あの森のとある木の下に、盗賊の宝が埋められているらしいです。すでにその盗賊は他国で処刑され、宝だけがそこに残った、と言われています』

目をキラキラと輝かせるウィリアム。興味津々と言ったご様子である。

『一緒に行きますか？』

『うん！』

ウィリアムの即答に、ノルマンはニッコリと微笑んだ。

街道から外れ、森に至る二人。当然人通りはなく、闇だけがこの場を支配していた。

『此処ですね。そこそこ掘らなきゃいけないので、待っていてください』

ノルマンが穴を掘る道具を取り出し、地面にそれを突き立てた。ざくざく、ざくざく。湿った大地は、かなり力を入れなければ掘ることができない。

『ふう、なかなか手強い』

疲れた様子のノルマン。それを見て眺めているだけのウィリアムは立ち上がった。

『僕も手伝うよ。代わってノルマン』

『ありがとうございます。交代交代でやりましょう』

掘り始めたウィリアム。ノルマンが驚くほどさくさくほっていく。

『こどもの頃から山で遊んでいたからね。こういうのは得意なんだ』

物凄い勢いで掘り進めるウィリアム。ノルマンは逆に手持ち無沙汰になる。

『ところでウィリアム、荷物は焚き火に置きっぱなしでしたか？』

「えっほえっほ……いや、一応大事な物はこっちに持ってきたけど？」

『ほほう、大事なものとは？』

『えっほえっほ、えーと、お金はもちろんだし、父上が作ってくれた剣と、あと身分証かな。此処まできたらその３つでどうにかなるしね』

『お、あの鍛冶王国でもあるルシタニア人が鍛えた剣、少し拝見してもよろしいですか？』

『かまわないよ。ところでこれは何処まで掘ればいいんだい？』

『もう少しですね』

ノルマンが荷物を漁り、剣を見つける。そしてその傍らにある羊皮紙を見つけて、ノルマンの口角が上がった。

『えっほえつほ、まだかい？』

『まだですよ。おお、これはすごい。とても美しい剣だ』

煌く白刃の剣。アルカディアでこれを手に入れようとするならば、一体どれほどの金が必要となるか。貴族でさえこれほどの剣は持ち得ない。美しさと強靭さを兼ね備えたフォルムに、ノルマンは魅せられる。

『そうでしょ！父上は剣の腕はぱっとしないけど、剣鍛冶は一流なんだ。ところでまだかな？もうかなり掘ったけど。もしかしたら別の場所なんじゃ？』

掘り進め、人一人入れそうな穴が出来上がってなお、宝は現れない。

『いえ、そこで間違いないはずです。きっともうすぐですよ』

『そうかなあ？人が掘ったことのある場所は、もう少し彫りやすいはずなんだけど。ごめんノルマン、ちょっと疲れちゃった。交代していいかい？』

ウイリアムは穴掘りの道具を渡そうと振り返――

『これからずっと、ね』

ウィリアムの腹部に、美しい白銀が煌いていた。自身の父が丹精込めて作成した逸品。それがウィリアムを貫く。ウィリアムは理解できなかった。己に降りかかった災厄を。

『な、んで？』

ウィリアムはよろける。剣からぬめりと血が、落ちる。

『なんでノルマンが僕を？』

刺されてなお、ウィリアムは信じられないでいた。友達だと思っていた。親友になったと信じていた。これから先、輝かしい未来が二人を待っていると、確信していたのに。

『くく、ノルマン、か。まず第一に、僕はノルマンじゃない』

ノルマンと名乗る青年はバンダナを外す。ふわりと広がるさらさらの白亜。月光に反射して煌く白は、普段んら美しいとさえ思うかもしれない。だが、今は恐怖しか浮かばない。その男の表情も相まって――

『僕のなはウィリアム。お前がくれるんだよ。喜べ、お前の名前がこの世界に広がり、お前の存在がアルカディアの上に往く。武功だって上げてやるさ。だから、死ね』

白髪の男がウィリアムに刃を突き立てる。ウィリアムを守るために打ち鍛えられたそれは、ウィリアムの肉をやすやすと断ち切った。右腕が舞う。

『い、意味がわからない！？僕たちは友達だった！そうじゃ、なかったのかよぉぉぉぉおおおおお！』

叫ぶウィリアム。しかしその声は誰にも届かない。この森に住まうものはいない。そして街道からもほどほどに離れている。ウィリアムの嘆きは誰にも届かない。目の前の男にも――

『友達、友達か。いや、たぶん無理だ。僕はお前が嫌いだし、きっと永遠に好きになれない』

ウィリアムの目が絶望に見開かれた。

『恵まれた環境、愛されて育ったのが目に見える。家族も、フィアンセもいる。そんな贅沢、そんな幸福、『僕ら』が許すわけないでしょおおおお！』

さらに白銀が煌く。ウィリアムの左手が舞った。ウィリアムの絶叫も、目の前の男には響かない。そんな心は五年前に砕け散っている。

『幸せは大事にするべきだった！こんなところに、より高きを目指すべきじゃなかった！器を読み違えた貴様は、どちらにしろどこかでのたれ死ぬさ。だからお前は僕に感謝しろ。願い通り、貴様の名をこの世界に轟かせてやるッ！』

ウィリアムの意識は徐々に混濁してきていた。傷口から血がとめどなく流れ行く。命が零れ落ちる。ノルマンとの友情、未来への確信が崩れ落ちる。

『ああ、ついでに教えといてやる。トレジャーハントの話は全部書物の受け売り、ノルマンはその本を売っていた店主の名前、そして――』

白亜の悪魔はウィリマを蹴飛ばした。『穴』に落ちるウィリアム。

『そこはお前の墓穴だよ。ウィィィィィりィァアァァアアアアアム！！』

すでにウィリアムからまともな思考は消えていた。あるのは幸せだった故郷の記憶。それらがアタあを駆け巡る。大切な、フィアンセとの思い出。家族との他愛ない会話。兄弟の、妹たちの、山々の記憶――

『おっと、首がはみ出ているぞウィリアム』

それを断ち切るように、白銀がウィリアムの首を断ち切った。

『さようならウィリアム。君に感謝しているよ』

転がる首は、すでに物言わぬ亡骸。赤い髪を引っ掴み、男は首を穴に投げ入れた。

「ふう、以外と……簡単に斬れるもんだな。それとも、これが良い剣なのかな？」

自身の国の言葉に戻った男は、しみじみと人の命を断ち切った感触を味わっていた。

平然とひた表情の男は、やはり何かが壊れたような、そんな様子に見えた。

穴の周辺に散らばった『ウィリアム』のかけらを拾い集め穴に投げ入れる。すべての痕跡を消して去った後、大きく伸びをした。

「まあいいや。ここからが本番。僕が、あの国で成り上がれるか、それがかかった一世一代の大勝負、だ。さっさとこいつは埋めてしまうか」

穴に土をかけ始める。その顔に、表情はない。

またひとつ白髪の男、アルは、業を積み上げた。